宮沢賢治・封印された「慢」の思想

―遺稿整理時番号10番の詩稿を中心に―

木村東吉

一　晩年の悔恨

一九三〇年の春頃、宮沢賢治はかつての花巻農学校での教え子に宛てた書簡で、悔恨の思いを繰り返し述べている。例えば三月一〇日伊藤忠一宛書簡に「根子ではいろいろお世話になりました。／たびたび失礼なことも言ひましたが、殆どあすこでははじめからおしまひまで病気（こころもからだも）みたいなもので何とも済みませんでした。／どうかあれらの中から捨てるべきは　はっきり捨て再三お考になってとるべきはとって、あなたご自身で明るい生活の目標をおつくりになるやうねがひます」（No.258. 番号は全集の書簡整理番号。以下同じ）とある。伊藤氏は根子村字桜の出身で、自宅が羅須知人協会の隣地にあった関係もあって、羅須知人協会会員となったとされている。作者が《春と修羅　第三集》（筆者は賢治の詩集を動態として捉えている。従って、動態としての詩集を《春と修羅　第二集》《春と修羅　第三集》と記し、『新・校本宮澤賢治全集』第三巻・第四巻のテキストを『春と修羅　第二集』『春と修羅　第三集』と記して、以下適宜《第二集》『第二集』等と略記する。）の素材を得た時期に接した人物で、作品中にもモデルとして登場する（七三八「はるかな作業」一〇一七〔水は黄いろにひろがって〕一〇四六〔萱草芽をだすどてと坂〕などの初期稿）。賢治の書簡の言葉は一般に丁寧だが、この書簡には教師の体面を捨てた真摯な姿勢がある。

また、同年四月四日沢里（旧姓高橋）武治宛書簡には、「私も農業校の四年間がいちばんやり甲斐のある時でした。但し終りのころわづかばかりの自分の才能に慢じてじつに虚傲な態度になってしまったこと悔いてももう及びません。しかもその頃はなほ私には生活の頂点でもあったのです。もう一度新らしい進路を開いて幾分でもみなさんのご厚意に酬いたいとばかり考へます」（No.260）とある。

《春と修羅　第二集》「告別」で「おまへ」と呼びかけられている生徒のモデルとされている人物への書簡だが、悔恨をもって振り返っている時期は、やはり花巻農学校を辞職した時期である。

これらの書簡が書かれた時期は、『詩ノート』から《第三集》へと構想が展開している時期よりやや前にあたる。したがって、作者のこのような思いが直接《第三集》の解体につながることはなかった。

しかし、この「自分の才能に慢じて」とある自省の言葉は、一九三三年九月になって、もう一度繰り返されている。一一日付柳原昌悦宛書簡では、「けれども咳のないときはとにかく人並に机に座って切れ切れながら七八時間は何かしてゐられるやうなりました。あなたがいろいろ想ひ出して書かれたやうなことは最早二度と出来さうもありませんがそれに代ることはきっとやる積りで毎日やっきとなって居ります。しかも心持ばかり焦ってつまづいてばかりゐるやうな訳です。私のかういふ惨めな失敗はたゞもう今日の時代一般の巨きな病、『慢』といふものの一支流に過って身を加へたことに原因します。僅かばかりの才能とか、器量とか、身分とか財産とかいふものが何かじぶんのからだについたものでもあるかと思ひ、じぶんの仕事を卑しみ、同輩を嘲けり、いまにどこからかじぶんを所謂社会の高みへ引き上げに来るものがあるやうに思ひ、空想をのみ生活して却って完全な現在の生活をば味ふこともせず、幾年かゞ空しく過ぎて漸くじぶんの築いてゐた蜃気楼の消えるのを見ては、たゞもう人を怒り世間を憤り従って師友を失ひ憂悶病を得るといったやうな順序です」（No.488）と述べている。この書簡でも回顧されているのは、一九二六年当時のことであろう。この書簡が書かれた時は《第三集》の作品の多くが文語詩化され、詩集も解体されていた。[1]《第三集》の詩稿を整理していた黒クロス表紙Eの力紙には、「この篇みな／疲労時及病中の／心こゝになき手記なり／発表すべからず」というメモが残されている。先の伊藤宛書簡のことばを彷彿させるメモである。

柳原宛書簡では「今日の時代一般の巨きな病、『慢』といふもの」を外在的なものと捉えたうえで、それに「過って身を加へた」内的要因として「僅かばかりの才能とか、器量とか、身分とか財産とかいふものが何かじぶんのからだについたものでもあるかと思」っていたことを認めている。花巻農学校辞職を目前にして、岩手国民高等学校に講師として協力しつつ、他方では陰ながら労農党を支援したり、辞職後は羅須地人協会の活動を企図していたことなどが回顧されているのであろう。一方で弥栄主義等ともつながった岩手国民高等学校に参加し、[2]他方で労農党を支援するというのは、今日から見れば矛盾を孕んでいる。こうした時代の社会的運動に同調したことが、一九三〇年以降の作者に悔恨の対象となっているのである。

この点と連動して繰り返し指摘されてきたことは、作者のプロレ

タリア文学への接近と離脱である。しかしこのことから、国柱会に所属しつつ労農党に対するシンパ活動をしていた者が、後者を放棄したことをもって直ちに右傾化を憶測するのは性急である。[3] 詩集の編集過程を跡づけてみると、確かに一九二七年頃整えられた『詩ノート』にある一〇二〇〔労働を嫌忌するこの人たちが〕一〇二一〔あそこにレオノレ星座が出てる〕一〇五六〔サキノハカといふ黒い花といっしょに〕といったプロレタリア文学への接近を示す表現を持った作品は、一九三〇年頃詩稿用紙に書き写された『第三集』と作品番号を合わせて見ると、それぞれ「野の師父」「和風は河谷いっぱいに吹く」〔秘事念仏の大元締が〕に差し替えられている。[4] 露骨な表現は避けられているから、社会運動の戦列からみれば一定の後退だが、モティーフの変更はあっても主題的には同じ内容を裏面から捉えた作品と差し替えている。しかも、このうちの「野の師父」は改稿されて『第三集補遺』に「表彰者」として一九三三年六月に作られたという定稿詩稿用紙に清書稿が残されている。

また、学校劇禁止令にふれるところがあったことによって、作品を差し替えたり改稿したり、一時過敏な反応を示した《第二集》の九〇〔祠の前のちしゃのいろした草はらに〕と「風と反感」については、最終的に一定の韜晦表現に改めた上で両作品とも定稿詩稿用紙に清書している。[5] これらの流れを見る限り、表現の尖鋭さは避けているとしても、あえて思想的変節の可能性を言うのは当たらないと思われるのである。

「雨ニモ負ケズ」に書かれた願望も、周囲からはデクノボウと見られながら菩薩行に精励したいというのが、そのおよその意味だと理解するならば、[6] これも『慢』といふものの一支流に過って身を加へた」ことを認めたことの反省の一面と考えられる。しかし、この願望を行動として実践することは、作者にとって体力的に不可能であった。

そこで実際には病床にあって、「それに代ることはきっとやる積りで毎日やっきとなって居」たのが創作活動である。一九三三年一月七日菊池武雄宛書簡に「一昨年位の健康はちょっと取り戻せさうにもありません。それでもどうでもこの前より美しいい、本の数冊をつくりあげる希望をば捨て兼ねて居ります。何卒ご鞭撻ねがひ上げます」(No.445)とあり、定稿詩稿用紙に書かれた二〇〇篇を超える詩稿を考え合わせると、それは容易に推測されることである。

ではこの時期における作者が目指した文芸が、どのようなものであったかといえば、その一端が次の作品に示されている。定稿詩稿用紙に書かれ、大幅な改稿が見られるものであるから、晩年の作者の志向が反映されたものと見られる。

お、恋人の全身は／玲瓏とした氷でできて／谷の氷柱を靴にはき／淵の薄氷をマントに着れば／胸にはひかるポタシュバルヴの心臓が／耿々としてうごいてゐる／やっぱりあなたは心臓

を／三つももってゐたんですねと／技手がかなしくかこって云へば／〔佳〕人はりうと胸を張る／どうして三つか四つもなくて／脚本一つ書けませう／技手は思はず憤る／なにがいったい脚本です／あなたのむら気な教養と／愚にもつかない虚名のために／そこらの野原のこどもらが／小さな赤いも、ひきや／足袋ももたずにゐるのです／旧年末に家長らが／魚や薬の市へ来て／溜息しながら夕方まで／行ったり来たりするのです／さういふ犠牲に値する／巨匠はいったい何者ですか／さういふ犠〔牲〕に対立し得る／作品こそはどれなのですか／もし芸術といふものが／蒸し返したりごまかしたり／いつまでたってもいつまで経っても／やくざ卑怯の遁げ場所なら／そんなものこそ叩きつぶせ／云ひ過ぎたなと思ったときは／令嬢（フロイライン）の全身は／いささかピサの斜塔のかたち／どうやらこれは重心が／脚より前へ出て来るやう／ねえご返事をききませう／なぜはなやかな機智でなり／突き刺すやうな冷笑なりで／ぴんと弾いて来ないんです／お、傾角の増大は／tの自乗に比例する／ぼくのいまがた云ったのは／ひるま雑誌で読んだんです／しっかりなさいと叫んだときは／ひとはあをあを昏倒して／ぢゃらんぱちゃんと壊れてしまふ

（『第二集補遺』〔雪と飛白岩（ギャブロ）の峯の脚〕定稿）

ここに幻想されているミューズは発電所の配電盤に重ねられたものだが、詩人はこのミューズに象徴される既成の文学にも心惹かれながら、文芸も村人達の犠牲のうえに成り立つものという認識に立って、その犠牲に酬いるに足る、「やくざ卑怯の遁げ場所」とならないものを求めている。ただ、こうした立場に確固としたものをもっているわけでもないかのように、幾重にも屈折した表現になっているが、希求しているところの大筋はかつて岩手国民高等学校で講じた『農民芸術論綱要』の「農民芸術の興隆」や「農民芸術の本質」の項を踏まえたその延長線上にある。

もう一つ、作者の最晩年の志向を窺わせる詩作品がある。

（前略）かういふひそかな空気の沼を／板やわづかの漆喰から／正方体にこしらえあげて／ふたりだまって座ったり／うすい緑茶をのんだりする／どうしてさういふやさしいことを／卑しむこともなかったのだ／　　……眼に象って／　　かなしいあの眼に象って……／あらゆる好意や戒めを／それが安易であるばかりに／ことさら嘲り払ったあと／ここには乱れる憤りと／病ひに移化する困憊ばかり（後略）

（五一一〔はつれて軋る手袋と〕定稿）

慎ましい家庭生活さえ排して自ら選んだ困難な生き方も一種のヒロイズムとみなしたのであろうか、否定的に省みており、先の書簡に見えた言葉とも共通点がある。この作品も農学校の辞職を決意した時期に取材したもので、当時の自身のあり方に向けられた批判で

ある。この作品に「かういふしづかな空気の沼を／粘土や紙でこしらえて／ふたりしづかに座ったり／うすい緑茶をのんだりする／どうしてそれを卑しむこともなかったのだ」という詩句が加えられたのは、一九三〇年末以後使われた黄罫22系詩稿用紙に書かれた二次清書稿段階からであることにも留意する必要がある。(7)

では、その作者が「時代一般の巨きな病、『慢』といふものの一支流に過って身を加へた」と捉えているものとは、具体的にどのようなものであろうか。

二　晩年の詩稿の分類と封印された詩稿群

考察のための手がかりとして、ここでは最晩年の詩稿の整理法に注目してみたい。

『新・校本宮澤賢治全集』第十六巻（上）には、詩稿に付された三種の遺稿整理時番号が記載してあり、このうち「朱のスタンプインクをつけて押されたゴム印番号」は、作者が死の床にあって、床の脇に分類して山積みにしてあった詩稿の状態を記録したもので、同一の山の詩稿に同じ番号を付したものとされている。これについて検討してみると、10の印がある詩稿が四八枚（併記された文語詩や中間稿を除いた口語詩最終稿が四五編）あって、黒クロース表紙Eの表紙裏にも、同じゴム印10が5カ所押されており、その力紙に先述のとおり「この篇みな／疲労時及病中の／心こゝになき手記なり／発表すべからず」とメモされている。以下これを10番稿と呼ぶことにして、このメモに従うならば、この10番稿は封印された詩稿群だったことになる。本稿では、これらの詩稿に注目してみたい。

その前に詩稿全体の整理状態を概観しておけば、同じ呼び方で1番稿とNo.1番稿は初期稿である。2番稿は文語詩の定稿化候補稿（実際は現行の文語詩定稿を取り去った後の残存未定稿。一部口語詩を含む）で、3番稿は「春と修羅第二集に加ふるもの／未定稿なるも／断片として発表差支なし」とされた口語詩の定稿化候補稿である。4番稿と5番稿は定稿が作製された作品の定稿直前の逐次稿である。10番稿は、2番稿・3番稿を選び出す過程で分離されている。詩稿に付された番号は以上の7種類で、定稿詩稿用紙に書かれたものと習字用等他に転用された詩稿（破棄稿）には原則としてこの遺稿整理時番号がない。この他「疾中」の詩稿も別置されていたために、この遺稿整理時番号はない。

この遺稿整理時番号と詩集との関係についてみれば、10番稿が主として『第三集』および『口語詩稿』の作品である（『第二集』の作品は二篇）のに対し、3番稿は『第二集』と『第二集補遺』の作品が主体で、『第三集』と『口語詩稿』の作品も混在している。作者は晩年になって『第三集』及び『口語詩稿』の作品の多くを文語詩の素材稿とし、〈第三集〉構想を解体し、残った詩稿を10番稿と3番稿に分離したと見られる。『第三集』及び『口語詩稿』の作品

にも、定稿詩稿用紙に清書されているものがあるので、文語詩化されなかった作品がすべて10番稿とされたわけではないことが知られ、3番稿に『第三集』及び『口語詩稿』の作品も含まれていて、黒クロース表紙Aの表紙裏に天地を逆にして「春と修羅第二集に加ふるもの」とメモした意図が了解されるのである。[8]「未定稿なるも／断片として／発表差支なし」とあるので、一篇ずつ独立作品として扱われるものだった可能性もある。

そこで10番稿が封印された理由を考えるとすれば、『第三集』『口語詩稿』の作品で、定稿詩稿用紙に書かれたものや3番稿に分類された作品との対比が重要な意味を持ってくる。3番稿定稿については稿を改めて考察するが、本稿でも比較しつつ考察を進めたい。

ただし、この詩稿分類には、少し曖昧な部分がある。筆者がかつて尋ねた時の宮沢清六氏の証言によると、詩稿にこのゴム印番号を付したのは氏自身だが、氏が番号を打つ以前に、氏以外の人物が詩稿に触れているとのことであった。分類の意味に無理解な人物が触れた場合は、詩稿用紙が綴じられていない便箋型の紙葉であるから、一部だとしても錯綜の可能性を否定できないわけである。このような保留条項がつくとしても、作者自身が封印した詩稿について、一定の傾向を確認できるならば、作者の最晩年の志向を知るために有効であろう。

三　農民への接近とdistinctionの慾望の否定

そこで先ず、先に取り上げた〈第三集〉の差し替え稿のうち、一〇二〇〔労働を嫌忌するこの人たちが〕の差し替え稿で定稿用紙に書かれた「表彰者」と一〇二一〔あそこにレオノレ星座が出てる〕の差し替え稿で10番稿の「和風は河谷いっぱいに吹く」を比較してみたい。先に挙げた伊藤忠一宛書簡に「捨てるべきは　はっきり捨て再三お考になってとるべきはとって」と述べたことを、作者が自身の作品に対してどのように実現しているかを見るためである。作品は次のとおりである。

表彰者

萱もたほれ稲もたほれて／野はらはいちめん／ぼんやり白い水
けむり／その縁さきにちょこんと座って／翁(おきな)はうつろなまなこ
をあげ／そらのけはひを聴いてゐる／向ふは幾層つゝみの水
が／灰いろをしてあふれてゐるし／幾群くらい松の林も／みな
黒雲の脚とすれすれ／一様天地の否(ひ)のなかに／たゞ桃いろの稲
づまばかり／そこらを一瞬ふしぎな邦と湧きたゝせ／やがては
冬も麻を着て／せわしく過ぎた七十年を／頭ごなしに嘲けりな
がら／表彰するといったふう／　　……匪徒は歳ごと数も増せ
ば／　　慾求の質も貢進する……／白くながれる雲の川
に／巫戯化た柳が一本たつ

（空白は字下げ分。以下同じ）（定稿）

白い水煙をあげるほどの強い雨のために萱も稲も倒れてしまった中で、縁先に座った七〇歳にも見える老農夫が呆然と雨音に耳を傾けている。雷鳴と共に稲妻の光の中に浮き上がるその姿を、詩人はフラッシュを浴びる様に見なしてか「頭ごなしに嘲けりながら／表彰するといったふう」と捉える。併せてこれを農業を取り巻く諸環境の象徴と捉えて、その社会的諸環境についての思いなのか、「……匪徒は歳ごと数も増せば／　慾求の質も貢進する……」といったことばが詩人の脳裏をかすめている。そうなると雨の中で風に揺れる柳さえも「巫戯化た柳が一本たつ」と見えるというのであろう。情景としては悪天候の中で軒端に座った老農夫を描いたものにすぎないが、農民への深いいたわりと取り巻く社会的諸環境への怒りにも近い思いが伝わってくる。含むものの大きな作品である。『第三集補遺』で唯一定稿化されている作品である。[9]

これに対して、10番稿「和風は河谷いっぱいに吹く」の場合は次のとおりである。

一〇二一／　　和風は河谷いっぱいに吹く／　　一九二一
七、八、二〇、
たうたう稲は起きた／まったくのいきもの／まったくの精巧な機械／稲がそろって起きてゐる／雨のあひだまってゐた穎は／いま小さな白い花をひらめかし／しづかな飴いろの日だまりの上を／赤いとんぼもすうすう飛ぶ／あゝ／南からまた西南から／和風は河谷いっぱいに吹いて／汗にまみれたシャツも乾けば／熱した額やまぶたも冷える／あらゆる辛苦の結果から／七月稲はよく分蘖し／豊かな秋を示してゐたが／この八月のなかばのうちに／十二の赤い朝焼けと／湿度九〇の六日を数へ／茎稈弱く徒長して／穂も出し花もつけながら、／ついに昨日のはげしい雨に／次から次と倒れてしまひ／うへには雨のしぶきのなかに／とむらふやうなつめたい霧が／倒れた稲を被ってゐた／あゝ自然はあんまり意外で／そしてあんまり正直だ／百に一つなからうと思った／あんな恐ろしい開花期の雨は／もうまっかうからやって来て／力を入れたほどのものを／みんなばたばた倒してしまった／その代りには／十に一つも起きれまいと思ってゐたものが／わづかの苗のつくり方のちがひや／燐酸のやり方のために／今日はそろってみな起きてゐる／森で埋めた地平線から／青くかゞやく死火山列から／風はいちめん稲田をわたり／また栗の葉をかゞやかし／いまさわやかな蒸散と／透明な汁液（サップ）の移転／あゝわれわれは曠野のなかに／芦とも見えるまで逞ましくさやぐ稲田のなかに／素朴なむかしの神々のやうに／べんぶしてもべんぶしても足りない

（黄罫24系詩稿用紙　最終形）

夏のはじめは豊作を期待させる作柄であった稲が、不順な天候の

ために「茎稈弱く徒長して」いたこともあって、強い雨で倒れたらしい。稲作指導の経験者の教示によると、深く倒れた稲が立ち直ることはないけれども、開花期を迎えたばかりのまだ穂の軽い段階で、60度前後までの倒れ方をした場合なら、風の向きなどによって起きあがることもないわけではないという。作品の素材を得た日の気象データを参照してみると、前日からの花巻での降水量は97ミリである。土砂降りの雨で稲が倒れたわけだが、盛岡気象台のデータでは、前日来の南よりの風がこの日の午後になって北あるいは西北西の風に変わっている。風の方向はその場の地形や時間によって異なるから気象台のデータと作品に描かれた風向きが一致するとは限らない。ともあれ、風向きが変わったわけで、これも幸いして作品に描かれたような奇跡的事実があったのであろう。[10] 起きあがった稲を見て文字通り欣喜躍雀している詩人の姿は微笑ましく、それまでの倒れた稲を前にしての心痛を思えば、かえって涙ぐましくもなる作品である。

この作品がなぜ「疲労時及病中の／心こゝになき手記なり」として封印されるのか。この作品だけを見ていては理解に苦しむところである。しかし、考えてみれば、気象状況などからして、周囲の稲田との間に差があったことが当然考えられる。そうした状況を踏まえれば、自分の稲の成功を単純に喜べないのではあるまいか。

同日の作品に、一〇八八〔もうはたらくな〕とこれが番号と日付を失った形の〔降る雨はふるし〕がある。パセティックな詩人の姿が出ている作品だが、これも10番稿に分類されている。併せて考えてみると作者の作品選択の事情がより明確になる。作品は次のとおりである。

〔降る雨はふるし〕

降る雨はふるし／倒れる稲はたほれる／たとへ百分の一しかない蓋然が／いま眼の前にあらはれて／どういふ結果にならうとも／おれはどこへも遁げられない／　……春にはのぞみの列とも見え／　恋愛そのものとさへ考へられた／鼠いろしたその雲の群……／もうレーキなどほうり出して、／かういふ開花期に／続けて降った百ミリの雨が／どの設計をどう倒すか／眼を大きくして見てあるけ／たくさんのこわばった顔や／非難するはげしい眼に／保険をとっても辨償すると答へてあるけ

（黄野24系詩稿用紙　最終形）

詩人の自らを鞭打つことの激しさを代表するとも見られてきた作品だが、自分の稲が起きあがったとしても、それが「わづかの苗のつくり方のちがひや／燐酸のやり方のため」であるなら、自分が指導した稲がすべて起きたのであればよいが、倒れたものが多ければ「おれはどこへも遁げられない」と覚悟を決めるはめになる。「たくさんのこわばった顔や／非難するはげしい眼に」会って、「保険をとっても辨償すると答へてあるけ」とまで自分を鞭打つ状態であれ

ば、もはや「和風は河谷いっぱいに吹く」を公表できる状況にない。「表彰者」との対応で言えば、農民と共にある文芸が目指されており、これに照らして不適切なものが封印されているといえよう。

しかもこのように考えることは、やがて反転すれば「じぶんはいちばん条件が悪いのに／いちばん立派なことをすると／さう考へてゐたいため」で、「要約すれば／これも結局distinctionの慾望の／その一態にほかならない」（『口語詩稿』「心象スケッチ　林中乱思」）といった内省の対象になる。これもまた倨傲あるいは「慢」の思想と捉えたとして不自然ではない。これらの作品を作ったのも作者だが、これらに封印した事実にこそ作者の最晩年の思想的到達点があることを、我々はこれまで見逃してきた。

類似のテーマを持つ作品で、やはり10番稿に収められているものに七一五〔道べの粗朶に〕等もある。一〇一五〔バケツがのぼって〕や「停留所にてスキトンを喫す」のような、象徴的表現をとったものであっても、やはり10番稿に含められている。「停留所にてスキトンを喫す」は農業指導のために歩いて病に倒れ、「あとは電車が来る間／しづかにこゝへ倒れやう／ぼくたちの／何人もの先輩がみんなしたやうに／しづかにこゝへ倒れて待たう」というもので、あたかも銀河鉄道の電車を待つ詩人自身を描いたかのようなものだが、これも10番稿としている。佐藤泰正はここに「青き〈神話〉への投身の身振りもない」とする[11]のだが、詩人自身の自己を見つめる目はもっと厳しい。これに対して友人と共に視察のために田の中を歩いたことを描いた「穂孕期」は3番稿としている。こうした対比によって作者の選択基準は明らかであろう。

作品選択基準がこのように析出されてみると、高踏的な姿勢で農民批判をした作品群が10番稿に整理されている理由も容易に理解できる。《第三集》の七三五「饗宴」（補遺形〔みんな酸っぱい胡瓜を噛んで〕）『口語詩稿』の〔もう二三べん〕等がこれにあたる。作品は次のとおりである。

〔みんなは酸っぱい胡瓜を噛んで〕

みんなは酸っぱい胡瓜を噛んで／賦役に出ない家々から／集めた酒をのんでゐる／中で権左エ門の眼は／眼がねをかけたやうに両方あかく／立って宰領する熊氏の顔はひげ一杯だ／褶のけむりは稲いちめんにひろがって／雨はどしどしその青い穂に注いでゐる／おれはぼんやり稲の種類を答へてゐる／さっき何べんも何べんも／あの赤砂利をかつがせられた／顔のむくんだ弱さうな子は／みんなのうしろの板の間に／座って素麺をたべてゐる／その赤砂利を盛った新らしい土橋は／楢や杉の暗い陰気な林をしょって／やっぱり雨に打たれてゐる／ほだのけむりがそこまで青く這ってゐる

（黄罫24系詩稿用紙　最終形）

集落の共同作業の日であろう。途中で雨が降り出したのか、賦役に出ない家から集めた酒で「みんなは酸っぱい胡瓜を噛」みながら

の慰労会が催されている様子である。酒を飲む「権左エ門の眼は／眼がねをかけたやうに両方あかく」なり、宰領する熊氏は「ひげ一杯」の顔で得意然としている。その陰で「顔のむくんだ弱さうな子」が「うしろの板の間に／座って素麺をたべてゐる」という。家庭の事情で賦役に出る大人が居ないばかりでなく、賦役を休んで酒を出すだけのゆとりもないために、大人に混じって賦役に出ているらしいその子が、共同作業の場では「何べんも何べんも／あの赤砂利をかつがせられ」ていたのを詩人は思い出しているわけだが、暗に指導層への批判となっている。

〔もう二三べん〕では、批判が更に具体的になっている。全文の引用は省略するが、「もう二三べん／おれは甲助をにらみつけなければならん／山の雪から風のぴーぴー吹くなかに／部落総出の布令を出し／杉だの栗だのごちゃまぜに伐って／水路のへりの楊に二本／林のかげの崖べり添ひに三本／立てなくてもい、電柱を立て／点けなくてもい、あかりをつけて／そしてこんどは電気工夫の慰労をかね／落成式をやるといふ／林のなかで呑むといふ／幹部ばかりで呑むといふ／おれも幹部のうちだといふ／なにを！　おれはきさまらのやうな／一日一ぱいかたまってのろのろ歩いて／この穴はまだ浅いのこの柱はまがってゐるの／さも大切な役目をしてゐるふりをして／骨を折るのをごまかすやうな／そんな仲間でないんだぞ」（黄罫24系詩稿用紙　最終形）などというものである。

傍観的に冷笑するのに比べると、本気で怒りをぶつけているだけ地域住民に近づいているのだが、「distinctionの慾望」を否定するなら、こうした作品も10番稿に収められて当然であろう。

むしろ驚かされるのは、農業指導に関することでも、詩人自身の指導者意識が現れたものは封印されていることである。一〇八二〔あすこの田はねえ〕などがそれにあたる。この慈愛に満ちた祈りを込めた作品すら10番稿にしているところに、作者の自省の厳しさが見られるところである。

一〇八二／　〔あすこの田はねえ〕／一九二七、七、一〇、

あすこの田はねえ／あの種類では窒素があんまり多過ぎるから／もうきっぱりと灌水を切ってね／三番除草はしないんだ／……一しんに畔を走って来て／　青田のなかに汗拭くその子……／燐酸がまだ残ってゐない？／みんな使った？／それではもしもこの天候が／これから五日続いたら／あの枝垂れ葉をねえ／斯ういふ風な枝垂れ葉をねえ／むしってとってしまふんだ／　……せわしくうなづき汗拭くその子／　冬講習に来たときは／　一年はたらいたあととは云へ／まだかゞやかな苹果のわらひをもってゐた／　いまはもう日と汗に焼け／　幾夜の不眠にやつれてゐる……／それからい、かい／今月末にあの稲が／君の胸より延びたらねえ／ちゃうどシャツツの上のぼたんを定規にしてねえ／葉尖を

刈ってしまふんだ／　……汗だけでない／　泪も拭いてゐるんだな……／君が自分でかんがへた／あの田もすっかり見て来たよ／陸羽一三二号のはうね／あれはずゐぶん上手に行った／肥えも少しもむらがないし／いかにも強く育ってゐる／硫安だってきみが自分で播いたらう／みんながいろいろ云ふだらうが／あっちは少しも心配ない／反当三石二斗なら／もうきまったと云ってい、／しっかりやるんだよ／これからの本統の勉強はねえ／テニスをしながら商売の先生から／義理で教はることでないんだ／きみのやうにさ／吹雪やわづかの仕事のひまで／泣きながら／からだに刻んで行く勉強が／まもなくぐんぐん強い芽を噴いて／どこまでのびるかわからない／それがこれからのあたらしい学問のはじまりなんだ／ではさようなら／……雲からも風からも／　透明な力が／　そのこどもに／　うつれ……　（黄野24系詩稿用紙　最終形）

このような作品までが、作者の言う「『慢』といふものの一支流に過って身を加へた」ことになるのかどうか断定は難しいが、佐藤通雅が「やや説教じみているが高揚したいい方が久しぶりに出現している」と指摘するとおり[12]、教え子への指導者意識は明確で、同一の地平に立った表現でないところに削除の理由はあるのかもしれない。このように考えるなら、七四〇「秋」が10番稿に収められているのも、農業指導の場に向かう場面を描いたものであるためと了解できる。一〇二二〔一昨年四月来たときは〕が10番稿になるのも、同じ理由であろう。

四　否定された過去

〔あすこの田はねえ〕の場合、実地についた努力の重要性を強調するあまり、教職従事者を批判するような口吻を漏らしているので、作品を封印した理由をここに見いだしたくもなるのだが、そうではない。『口語詩稿』〔黄いろにうるむ雪ぞらに〕には、定稿があり、これにはもっと露骨な学校教育批判があるからである。定稿詩稿用紙に書かれた作品で、詩人の過去に関わることを否定的に捉えているものをまとめて見ておきたい。

〔黄いろにうるむ雪ぞらに〕は次のとおりである。

〔黄いろにうるむ雪ぞらに〕

黄いろにうるむ雪ぞらに／縄がいっぽん投げあげられる／／バンス！　ガンス！　アガンス！／　ちょろちょろしたこどもらをかり集めて／　制服を着せて／　何か教へるまねをする／やくざなはなしだ／／でんしんばしらの斉唱と／風の向ふで更に白白饑えるもの　（定稿）

教育者批判は、初期の童話『鳥箱先生とフウねずみ』などにも表れていたが、ここには更に厳しい学校システムそのものへの批判がある。《第二集》の四〇九〔今日もまたしやうがないな〕は定稿が

ある作品だが、これでは学校を沈没するタイタニックに喩えている。一九二四年の夏、賢治が花巻農学校で学校劇を上演する直前の八月七日、岡田文部大臣によって突然発せられた学校劇禁止令は、これが九月になって行政的に実施されるに至った段階から、作者を急速に落ち込ませている。これがやがて（一九二五、一、二五）の日付を持つ四〇九〔今日もまたしやうがないな〕に至るのである。教え子宛の書簡では、教員時代を頂点であったともしているが、当時の学校教育システムへの不信は拭いがたいものがあったのであろう。ただし、特定の教員を批判するつもりはなく、退職後失意の詩人が花巻農学校を訪ねた時に取材した一〇七九「僚友」は、10番稿に含めている。

反面、広く解釈すれば農民批判を含むけれども、羅須地人協会時代に取材する作品で、当時の自分のあり方に強い疑問を示した作品に、次のような作品がある。これが定稿に展開されているので特に注目しておきたい。

七四三／　〔盗まれた白菜の根へ〕／　一九二六、一〇、一三、

盗まれた白菜の根へ／一つに一つ萱穂を挿して／それが日本主義なのか／水いろをして／エンタシスある柱の列の／その残された推古時代の礎に／一つに一つ萱穂が立てば／盗人がここを通るたび／初冬の風になびき日にひかって／たしかにそれを嘲弄する／さうしてそれが日本思想／弥栄主義の勝利なのか

（定稿）

宮沢賢治と弥栄主義との明確な関わりを示す資料である。作品で見る限り、直接弥栄主義を否定しないで自分の行動を疑問視した表現になっている。したがって、これをもし自身の行動を弥栄主義の基準に照らして否定的に見ていると解釈すれば、作者は弥栄主義を肯定的に捉えていることになる。しかし詩人が自身の行動を弥栄主義による行動と捉えて、単純にそれを信じてきた自分を含めて、そうした行動を「勝利」とする弥栄主義に疑問を呈したものと解釈すれば、「日本思想／弥栄主義の勝利」とは盗人を萱穂で嘲弄することなのかと弥栄主義そのものへの疑問を呈した作品となる。

作品の成立過程をたどってみても、この点は検証できる。初期稿から定稿直前段階まで、作者は白菜の切り株に萱穂を刺す行動をもって、あえてこれを東洋思想の勝利とみなしている。この点を確かめるために、初稿を見ておけば次とおりである。

七三四／　白菜畑　／　一九二六、一〇、一三、

ここの柱のならびから／膨らみある水いろを／誰か二つはずして行った／つめたい風が吹いて吹いて／わたくしの耳もとで鳴るけれども／河はつやつや光ってすべって／はやくも弱いわたくしは／風が永久の観点から／じつにほのかにわらひながら／わたくしをなぐさめてゐると考へ／ひたひに接吻して／気

持ちを直せとさう云へば／きら、かにわらってさうもすると／じぶんでじぶんを迎へやうとするけれども／そんならまっすぐに強く進めと云って／かういふふうにその人をさせた／社会の組織や人の不徳を憎んで見ても／結局やっぱり畑を堀ってゐるより仕方ない／そこで断じてわたしの風よ／つめたい接吻をわたしに与へ／川よかゞやくおまへの針で／おれの不快を運んで行けだ／はっは　馬鹿野郎／それではおれは／この残された推古時代の礎に／萱穂を二つ飾って置かう／それが当分／東洋思想の勝利でもある

（ルビの†は誤字を校訂　黄罫26系詩稿用紙下書稿（二）第一形態）

風の接吻を受け、川に不快を流すことによって自然と一体化し、「かういふふうにその人をさせた／社会の組織や人の不徳」にも思いを馳せたうえで、「はっは　馬鹿野郎」と怒りをやり過ごしながら、「この残された推古時代の礎に／萱穂を二つ飾って置」くことをもって、「当分」の間の思想的勝利としているわけである。この思想を肯定的に捉える時は東洋思想としているが、疑問を呈し、否定的に捉えた定稿では弥栄主義に限定していることにも注目したい。自分の行動をともかく肯定的に捉えた時は、これを東洋主義の一部と見ていたのであろう。しかし、一九三一年頃から弥栄主義が政策的に推奨され始めるとこれを批判的にみるにいたり、過去の行動を弥栄主義と特定してこれに疑問を呈しているわけである。一定の韜晦表現は、当時のこの作者の常套手段であったことを踏まえて理解するなら、この改稿によって、自分の過去に対する一つの選別があったと見て良いであろう。弥栄主義批判を明確にした改稿は、定稿詩稿用紙においてが最初である。

以上、作者の最晩年の志向を探るため、自ら封印した詩稿、あるいは詩人が過去に関連したことを否定的に捉えなおした作品についてみてきた。この考察は、作者が積極的に主張しようとした3番稿や定稿と対比してこそ、より確かなものになるはずだが、この点については稿を改めて考察する。

注

注1　《春と修羅　第三集》の構想解体の時期推定については、拙著『宮澤賢治《春と修羅　第二集》研究』（渓水社　二〇〇〇年二月）第1分冊第三章参照。

注2　岩手国民高等学校と弥栄主義との関係については板谷英紀の「岩手国民高等学校について」（「ぶりきのメタル」第3号　二〇〇〇年七月ぶりメタ舎）に詳しい。デンマーク式の国民高等学校を推進した加藤完治が筧克彦の力説した古神道式の「ヤマトバタラキ」という体操を取り入れたものという。弥栄主義は一九三一年石黒英彦知事が岩手県に赴任して以後強力に推進されたという。

注3　例えば吉田司『宮沢賢治殺人事件』（太田出版　一九九七年三月）など。

注4　前掲拙著第四章参照。

注5　前掲拙著第四章参照。
注6　中村稔『宮沢賢治ふたたび』（思潮社　一九九四年四月）に教示を得た。
注7　榊昌子「五一一〔はつれて軋る手袋と〕考―『春と修羅』第二集の世界」（「秋田風土文学」一一号　二〇〇一年八月）にも同様の解釈がある。
注8　遺稿整理時番号とその性格についての詳細は前掲拙著第二章参照。
注9　磯貝英夫は「野の師父（一〇二〇）（「春と修羅・第三集」）賢治詩の〈解析〉」（「国文学　解釈と教材の研究」29巻1号　一九八四年一月）において、「野の師父」と「表彰者」を別作品とみるのが妥当とする。この点に異論はないが「野の師父」の最終稿はNo.1番稿であるから、ここでは定稿作品に注目する。別作品であるとしても、〔労働を嫌忌するこの人たちが〕の主題を、搦め手から捉え直したところがある点に変わりはない。
注10　拙稿「資料と考察『春と修羅　第三集』『詩ノート』創作日付の日の気象状況」（『近代文学の形成と展開・継承と展開8』山根巴・横山邦治編　和泉書院　一九九八年二月）参照。
注11　佐藤泰正「『停留所にてスキトンを喫す』考」（『佐藤泰正著作集6　宮沢賢治論』翰林書房　一九九六年五月）
注12　佐藤通雅「野の師父『春と修羅　第三集』」（「国文学　解釈と鑑賞」53巻2号　一九八八年二月）

―きむら・とうきち、島根大学教授―